『コティディエンヌ』紙とフランスの海外政策

永井　典克

1825年11月8日号

ここで取り上げるのは1825年11月8日付けの『コティディエンヌ』紙の一記事であるが、ここにもかの新聞の特徴、つまり王権を擁護しつつ当時のヴィレール内閣を攻撃するという特徴が如実に現れている。その攻撃は、国債、ハイチの独立、スペインの内乱、そしてまた新聞の検閲といった問題をめぐり内閣がとった行動に向けられている。攻撃全体を要約すれば、この内閣は善を行うことができない内閣で、もし善を行おうとするならば、過去の行動が悪であったと告白しなくてはいけない内閣であるということになる。しかし、興味深いことは、これだけ内閣批判をくり広げた後に、結局のところ本当に悪いのは内閣ではなく、内閣に間違った路を歩ませた悪しき助言者、追従者たちであると付け加えていることであろう。内閣に直接の責任をすべて負わせるわけにいかなかったのは、日ごとに検閲が厳しくなりつつあったことを考えれば当然のことであり、『コティディエンヌ』紙の内閣攻撃も遠回しな方法を取らざるをえなかった部分があるということであろう。

11月7日　パリ

もし今の内閣に何が起きているのかを見て、言われていること全てを聞く勇気があるのならば、自らの下手な政策によって落ち込んだ危険な状況に驚くことになるであろう。その時、内閣は王党派の願いと国家の利益にみあった体制に戻る必要性を感じるであろうし、自らの行動の中になにか害をもたらすようなものがあったことに気がつくであろう。ここで私たちは内閣の意図していたことを非難しようとしているのではないのだが、フランス全土から、宗教、王座、良識、そして社会全体を脅かす危険に対しての苦情や嘆きの叫び声があがっているのだ。もとの体制に戻るときが遅

くなればなるだけ、この種の政治的修正は難しくなるだろう。そして過ちを正すためには、国務の重荷をより確かで先見の明がある手に委ねるしかなくなる日がくることも遠いことではないだろう。

私たち王党派にとって、王権の執行者に非難の言葉を向けねばならないということは、なんと辛いことであろうか！　彼らが今では自分たちがそのために戦ってきた主義主張を忘れているとはいえ、言わば私たちの胸中から出てきたこの政権、私たちの同志として戦った人々を心から讃えることができないのはなんと辛いことであろうか！ しかし、誰もが感じている真実、ただ内閣だけが知らないようにみえる真実を言わないでおくことができようか。この真実は最も教養のない人々にまで明かされているというのにだ。あと数カ月もすれば、産業政策が必然的に優位をしめるものであるということが永遠に確実になるであろう。しかし、それは産業と商業が有益な当然の進歩をとげたとのではなく、社会における物質的なるものが、精神的、道徳的、保守的なるものに対して勝利したということに他ならない。しかしその時には、現在の内閣にとって、この事態の致命的な進行を止めるのは大変難しいことになるであろう。彼らは自らが間違えていたと、社会を悩ませている出来事の本質を理解していなかったと、自分たちに慎重さが欠けていたと認めるであろうか。過ちの告白は個人の良心の重荷を軽くしてくれる。しかし公の立場にある人に対してより厳しい判決がくだされるものだ。もし、軽率さが王座を危機に晒したのならば、軽率さを認めるだけで十分であろうか。

これほどまで厳しい非難に値する内閣はかつてなかったであろう。帝国の全政策をいくらかの国債のため犠牲にしたのは[1]、この内閣ではなかったか。そして、二年の間、投機売買に関する議論でもって、高貴な体制を待ち望んでいる君主制国家を騒がしたのも、この内閣ではなかったか。内閣は今や身をもって経験していながらも十分に排斥することができなかった過ちを認め、演壇の上から謝罪するのであろうか。王党派は彼らの主義主張が徳にかなったものであることを示す証言のさらなる一つとして、この告白に熱狂し感謝と共に受け取るであろう。しかし正直に言って、こう告白してもそれは今まで嘆かわしいほどの一徹さでなされてきた政治体制への非難としか受け取れないので、内閣の評判はわずかにしかあがらない

であろう。この内閣はここ二年の自らの言葉と行動に矛盾することなしに改悛することはできないのであり、また善をなすには、まず悪をなしたことを告白しなくてはならない内閣なのだ。

現在、もっとも背徳的な主義主張が世間にはびこり、人々に浸透し、人々を堕落させ、かつて信じられていたもの、神の愛、王の愛、そして権威への敬意に人々を背かせているというのは本当ではないか。この現在の状況の悪化から見れば、未来の全ては不確実なものとなる。これらすべての大損害に何らかの救済策をもたらすのが急務であると気がつかないほどに、内閣は舞台裏の策略やハイチの賠償金問題[2]に気を取られているなどと、私たちも考えてはいないのだが、では一体どんな救済策があるのだろう。彼らは新聞に関する法律を改変しようというのか。しかし新聞に関する全ての法は政府が信頼されているかどうか示すものである。踏みにじられた道徳、王権、貶められた宗教の擁護を、配慮を要するものごとの中でも二番目にしか置かず、新聞をそれが内閣の存続、行政の最高権威者に利益を与えることができるか否かにおいてしか見ない内閣が議会から救いとなる道理にかなった法を得ようとしても、それは難しいことであろう。

もし社会をむしばむ病の全ての種類を列挙し、自らがなした悪を癒す能力を現内閣が所有していないことを示そうと願っても、それには終わりがなかろう。国外の状況に話を進めることにしよう。

スペイン[3]には常に一番初めに目がいくが、スペインは一年前から苦しげに歩んできた路から抜け出そうとしはじめている。フランスの大臣はこの新しい政策に手を貸すことであろう。私たちもそうなるよう願っている。しかし王国の行政機関が善をなすため自分自身と対立することを余儀なくされているのを見ることは辛いことである。彼らはかつては支持したド・ゼア氏[4]の政策を今では非難し、かつては鎖で繋がれることを望んだ絶対王政について語りはじめ、ながいこと拒絶してきた教会の権力の助力をスペインにおいて再び求めるはめに陥っているのだ。

海を渡ったところの話をしよう。スペインの植民地は見捨てられた。スペインは正当なる主権の原則を復旧するための努力をするであろうか。私たちの内閣はこの点について、真の主義主張を述べることができるであろうか。サント・ドミンゴ[5]を政治運動に投じた政治家たちは、ブエノスア

イレスやコロンビアの共和国と戦うことができるのであろうか。ハイチの大統領と親交を結んでいる人々にペルーやメキシコの大統領[6]を認めないなどということができようか。これらの権力は全て同じような源から発しているのではないか。全ては反乱から、つまりは剣の正当性に源があるのではないだろうか。

もし私たちがこの情けない対比をさらに進めようというのなら、嘆かわしい二者択一を内閣が迫られているのを至る所に見ることができる。つまり内閣は善をなすことができないか、もし善をなそうとすれば、大変にまずい矛盾に自らの政策をさらさなくてはならなくなるということだ。そして、その矛盾は誰にでも感じられるだけに、国民が政権への信用を失うことになりかねないであろう。国民は権力の有益な支配の下に置かなくてはならないものなのにだ。おそらく私たちの出来事や状況を見るやり方が間違っているのかも知れない。しかし、もし政治的信念において私たちと王国の公務を導いているものとの意見が同じものならば、つまり彼らはもはや善を成すことができず、彼ら自身が人々の不平不満の原因となっていると、その不平不満は誇張されすぎているかも知れないが、それにも関わらず彼らは障害でしかないと、そして、キリスト教と王権に必要な体制を得ることが出来るほど自らが強くないと、そう私たちと同じように彼らが信じることがあるのならば、彼らの王党派の良心に訴えかけ、彼らの持つ政権を気高くも犠牲として捧げ、返還するように彼らの愛国心に要求しても、その要求には十分根拠のあることではないであろうか。もはや彼らは君主制を害することによってしか政権を維持することができないのだから。

王が信頼してその助言者として呼んだ人々など私たちには問題にはならない。政治的野心に無縁の私たちは愛と義務から王座を擁護しているのだ。彼らは私たちに間断なく徒党だの政治的偏見だのという言葉を投げつけてくる。彼らは私たちの批判の一貫した目的が権力者を倒し、その残骸の上に新たな権力者をうち立てることだと人々に信じさせようと、なにかよく分からないが様々な形容詞を私たちに浴びせかけてくる。

誠意ある読者諸君に宣告を下してもらいたい。私たちの批判には個人的な要素があるであろうか。検討と助言の正当な領域から逸脱しているであろうか。内閣が現在置かれている誤った状況に彼らを導いたのは私たちで

はない。そうしたのは彼らの追従者、全ての大臣の偽の友人たち、彼らを讃えながら破滅させるものたちなのだ。私たちの厳しい声は、しかし率直で公正なるものであって、私たち王党派が愛し支持する行政機関であれば多くの過ちを防がせていたであろう。しかし、彼らが私たちの言うことを聞きたくなくて耳を塞いだとしたら、それは私たちの罪になるのだろうか。私たちは一歩ごとに路を差し示したのに彼らが深淵に落ち込んだとしても、それは私たちの罪になるのだろうか。

1　ヴィレール内閣は亡命貴族を補償しようと、国債の年利を 5%から 3%に引き下げようとしていた。しかし、貴族院の反対に会い 1824 年その案を取り下げた。

2　ハイチは 1804 年共和国独立を宣言。フランスは 1825 年にそれを承認するが 1 億 5900 万フランの賠償金を条件づけた。

3　1820 年ブルボン朝のスペイン王フェルディナンド 7 世の専制に対し反乱が起きる。23 年フランス軍の干渉により挫折。

4　ド・ゼア　（フランシスコ＝アントニオ）（ 1770-1822 ）　政治家。1819 年にコロンビアの副大統領になり、20 年に英、仏、西に独立の承認を受けにいく。パリではリベラルに熱狂的に迎えられるが、時の政府は無視をした。

5　ドミニカはハイチが 1804 年独立を宣言したとき、フランスにとどまるが、全島統一を目指すハイチに占領された。

6　アルゼンチン：1816 年ラプラタ連邦としてスペインより独立を宣言。

コロンビア：1811 年スペインより独立を宣言。19 年大コロンビア共和国として独立。

ペルー：1821 年独立宣言。24 年にスペイン軍を撃退する。

メキシコ：1813 年スペインより独立を宣言。

ラテンアメリカ諸国はナポレオン戦争中の大陸封鎖により自立化し、1810 年頃から相次いで独立を宣言する。メッテルニヒらは弾圧を企てるが、イギリスの反対と不干渉を主張したモンロー宣言（ 1823 ）により、独立への干渉は排除された。このためフランス革命前の状態への復帰と維持を目指したウィーン体制（1815-48）は崩れていった。